

第2編 朴迫B遺跡

遺跡略号 NE-HZ・B
所 在 地 双葉郡浪江町大字室原字朴迫
調査期間 平成18年8月21日～11月17日
調査員 吉野 滋夫・高林 真人

第1章 周辺地形と調査経過

第1節 遺跡の位置と周辺地形

朴船B遺跡は、浪江町の東部にあたる室原地区に所在する。時期は縄文時代と平安時代にまたがる。本遺跡は、JR常磐線浪江駅から西北西約2kmの地点に位置し、本遺跡の約300m西には阿武隈高地の東縁を南北に走る県道いわき・浪江線があり、約400m北には国道114号線が東西に走っている。

本遺跡は阿武隈高地東縁部から続く東方向に伸びる丘陵部にある。この丘陵は、北の請戸川と南の高瀬川に挟まれており、本遺跡のある場所は請戸川南岸の中位河岸段丘面にあたる。請戸川南岸の段丘面は、北東方向に伸びる尾根が形成され、本遺跡は北東側へ舌状に伸びる尾根に位置する。この尾根の南西側と北東側には沢が入り込み、南東方向に伸びる小尾根が形成される。

平成18年度発掘調査区は遺跡範囲の西端部にあたる。地形は南東方向に伸びる小尾根と南西方向に傾斜する斜面で、南西斜面には小さな沢が入り込んでいる。発掘調査区の標高は59m～64mで、南西側の沢と調査区の境は急峻な崖で、比高差は5.7mである。同じ尾根の頂部付近には朴船D遺跡がある。現況は山林となっている。

(高 林)

第2節 調 査 経 過

朴船B遺跡は、平成8年度に福島県教育委員会の委託を受け、財團法人福島県文化振興事業団が分布調査を実施し、発見した遺跡である。遺跡範囲は14,000m²と登録された。採取された遺物は縄文土器・土師器で、縄文・奈良・平安時代の散布地とされた。

平成16年度には高速道路用地3,800m²を対象とし、福島県教育委員会の委託を受け、財團法人福島県文化振興事業団が試掘調査を実施した。その結果、土坑・溝跡などを検出し、縄文土器が出土したことにより保存面積は2,500m²となった。

平成18年度発掘調査の対象面積は、平成18年1月に東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所(以下いわき工事事務所と称す)・福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団との協議で、仲禅寺遺跡を優先して発掘調査に入る予定であった。しかし、6月29日の現地協議で、設計変更に伴う借地が平成19年3月以降となるため、仲禅寺遺跡の発掘調査は平成19年度に繰り延べることになった。さらに、当初提示された面積を発掘調査できなくなった東畠遺跡・沢東B遺跡を加えた調整分として、朴船B遺跡の2,500m²を振り替えて調査することになった。

7月18日に福島県教育委員会から発掘調査の指示を受け、8月21日から調査員1名で、発掘調査を開始した。まず、器材倉庫・作業員休憩所・トイレを設置後、発掘器材を搬入した。調査は重機

第2編 朴始B遺跡

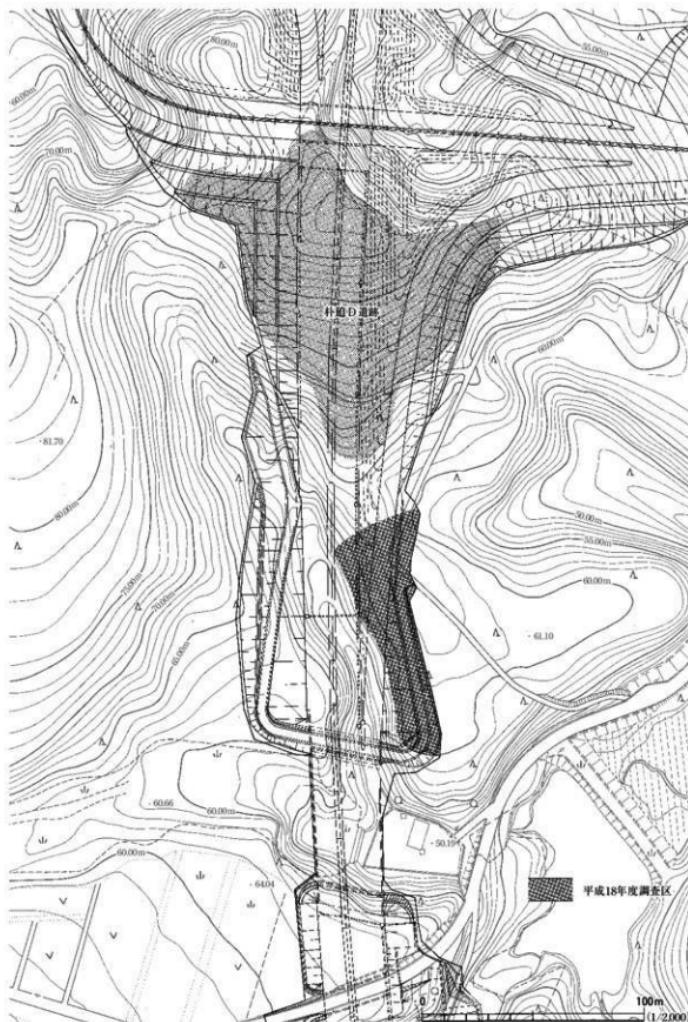


図1 朴始B遺跡調査区位置図

による表土剥ぎの後、調査区南東端から遺構検出を開始した。遺構検出は順次、調査区北西側に向かって進めた。

9月に入ると後田A遺跡の調査が終了したため、調査員2名体制となった。9月中旬にはLⅡ上面での遺構検出が終了した。LⅡからは、主に縄文時代前期後葉の土器が出土したことにより、遺物包含層とした。9月下旬にはグリッドを設定し、LⅡ上面で検出した土坑の精査・記録を行った。その後、グリッドごとに遺物包含層の掘り下げを開始した。10月初旬には調査区中央部で木炭窯跡を検出し、10月中旬には終了した。この頃には、LⅡの掘り下げがほぼ終了した。その下層のLⅢについても上面で遺構検出を行い、掘り下げを進めた。11月上旬にはLⅢを除去したことで、遺物包含層の調査が終了した。その後、地形測量と空中写真撮影を実施し、11月17日に発掘調査を終了した。

11月20日～22日にかけて発掘器材を器材倉庫へ搬入し、整備・収納を行った。11月22日には、調査区をいわき工事事務所に引渡した。さらに、11月28日～12月1日にかけて平成19年度の調査準備として、朴道D遺跡への重機進入路と駐車場の造成を行った。

(吉野)

第3節 調査の方法

遺構・遺物の地点を明示するため、世界測地系に基づいて発掘調査区全域に5m四方の方眼を設定し、これをグリッドとした。設定したグリッドの表記・呼称は、西から東へA・B・・・、北から南へ1・2・・・とし、これらを組み合わせてA1・A2・・・グリッドとした。A1グリッド北西杭の国土地標値は、X：166,750、Y：98,160である。

調査にあたっては、表土は重機を用いて除去した。表土除去後、遺物包含層上面で遺構の検出を行い、遺構が検出されなかったグリッドから人力で遺物包含層を層位ごとに掘り下げた。遺物包含層出土遺物はグリッド・層位ごとに取り上げた。遺構の掘り込みは、各遺構の形状・大きさなどを考慮して適宜土層観察用のベルトを残し、土の堆積状況や遺物の出土状況などに留意しながら掘り込みを行った。必要に応じて断ち割りを行って確認をしている。

遺構の記録については、実測図作成および写真撮影を実施した。平面図はグリッドを1mまたは50cm四方に細分した方眼の交点を基点に測量を行った。平面図・断面図は木炭窯跡を1/20で、土坑を1/10で作成し、遺構配置図および地形測量図は1/300で作成した。

写真撮影は、35mm小型一眼レフカメラとデジタルカメラを併用して行った。35mmカメラはモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットを3枚1単位で撮影した。空中写真撮影では67カメラを使用しプロニ版カラーリバーサルフィルム、プロニ版モノクロームフィルムで実施した。

発掘調査で得られた出土資料・調査記録は、当事業団が定めた整理基準に沿って整理を行い、報告書刊行後、作成した各種台帳とともに福島県文化財センター白河館に保管予定である。(高林)

第2編 朴始B遺跡

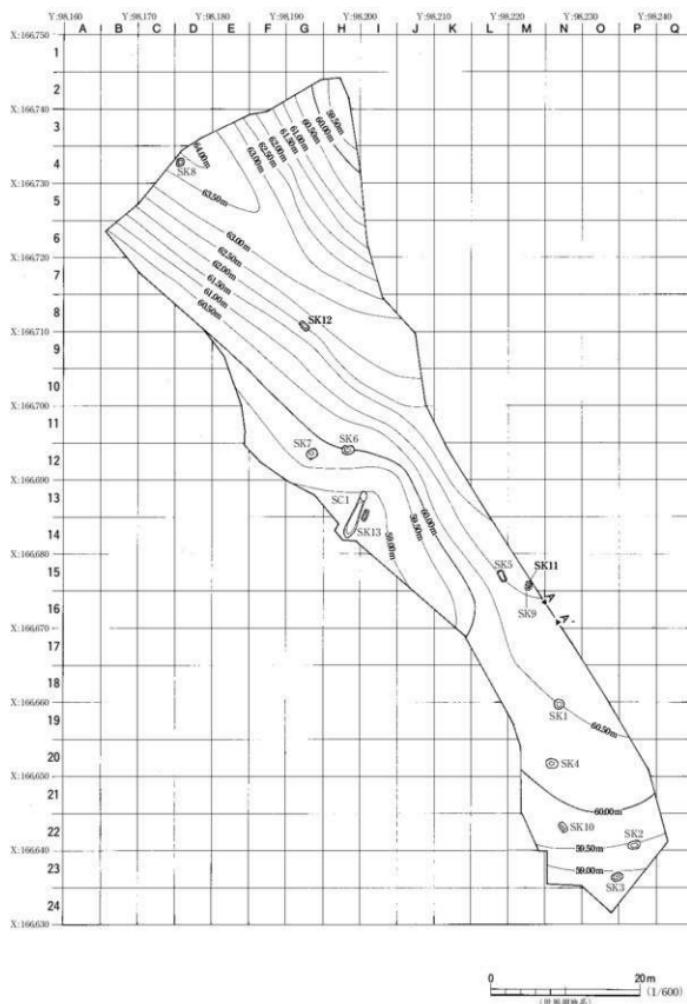


図2 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布(図2) 朴道B遺跡からは、平安時代の木炭窯跡1基、土坑7基と縄文時代の土坑6基のほか、縄文時代早期・後期・晩期の遺物包含層を検出した。検出された遺構は、すべて小尾根の頂部付近から南西斜面に造られている。平安時代の遺構は、木炭窯跡が南西斜面の小さな沢に造られている。土坑は5基が小尾根頂部付近に、2基が南西斜面中部の傾斜の緩い場所に造られている。縄文時代の遺構は、落し穴1基が小さな沢に、土坑5基が小尾根先端部に造られている。遺物包含層は南西斜面に見られ、北に行くに従って遺物出土量が少ない。

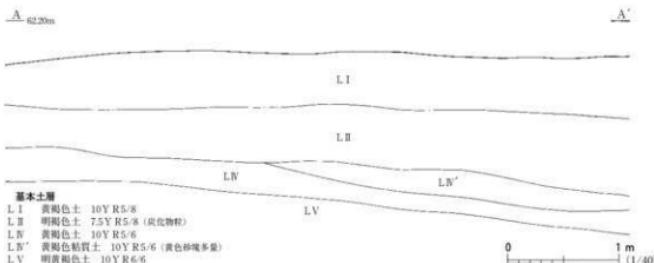
基本土層(図3) 本調査区の基本土層は、色調・土質などの特徴からL I～L Vまで5区分した。調査区の堆積状況は、主として細尾根先端付近の調査区東壁で、細尾根の方向と平行する方向で確認したものである。南西斜面部の堆積状況は適宜観察を行ない確認した。

L Iは現表土で、黄褐色土である。調査区内全域に堆積しているが、堆積状況は細尾根頂部が薄く、斜面下方に行くほど厚くなっている。層厚は10～30cmである。

L IIは明褐色土で、縄文時代早期・後期・晩期の遺物及び炭化物粒を含んでいる。細尾根頂部にはほとんど堆積しておらず、斜面下方に向かうほど厚く堆積している。遺物は北斜面からは出土しておらず、南西斜面も北部からの出土量は非常に少ない。木炭窯跡と大半の土坑がL II上面で検出された。

L IIIは褐灰色土である。調査区中央部の南斜面にある沢の崖地にのみ堆積しているもので、木炭窯跡の調査時に確認された。層厚は20～50cmである。

L IVは基盤層の漸移層で、黄褐色土である。細尾根頂部にはほとんど堆積が見られず、斜面部に堆積している。部分的に土質が異なり黄色砂塊が多量に混入する場所があり、その部分はL IV' と



した。層厚は10~20cmである。

L Vは基盤層で、明黄褐色土である。細尾根頂部では現表土の直下である。層厚は20~40cmである。調査区南部の細尾根端部付近では10~20cm大の礫が多く含まれていた。細尾根頂部付近にある8号土坑と、沢の底にある13号土坑はL V上面で検出されたが、掘込面はL IIもしくはL IIIであろう。

(高林)

第2節 木炭窯跡

1号木炭窯跡 S C 1 (図4, 写真3)

本木炭窯跡は、調査区中央部南端のI 13グリッドを中心とした位置にある。検出面はL II上面である。地形は南西側の崖に面した小さな沢である。本木炭窯跡は、その底面に造られていた。長軸は南北方向にあり、沢筋に対しては北西側に傾いている。

堆積土 本木炭窯跡については、当初、溝跡と考え調査を始めた。このため、土層観察の畔は焚口付近で設定した短軸方向のみである。堆積土は8層に区分した。そのなかで、ℓ 1・2は本木炭窯跡が使われなくなった後に、溜った流入土である。ℓ 3~5は天井部や側壁の崩落土である。ℓ 6・7は操業時に堆積した木炭層である。ℓ 7は作業場側で厚く堆積しているので、焼成室内の木炭層を搔き出した層であろう。ℓ 8は床面の改修に用いられた土である。そのため、ℓ 8の上面を新しい段階の操業面としてA面、ℓ 8以下の操業面を古い段階の操業面としてB面とした。

堆積土のなかで崩落土の占める割合が少ない。このことは、本木炭窯跡が沢の底面に立地していることから、降雨などによる流水により崩落土が溝状に侵食されたものと考えている。

構造 焼成室の構造は半地下式とする根拠もないため、地下式と考えている。焼成室の平面形は不整な隅丸長方形であるが、焼成室と焚口との形状に違いがない。作業場の平面形は不整な長楕円形である。本木炭窯跡の全長は7m、焼成室の最大幅は1mである。焚口は判然としないが、焼成室壁面の熱変化範囲が途切れた部分を焚口とすると幅は0.9mである。焼成室の最大壁高は0.38mである。焼成室床面の縦断面は焚口付近で10°の下り勾配、中程で5°の上り勾配で、段差をへて奥壁までは6°の上り勾配である。

熱変化 焼成室の床面では焚口・奥壁付近、壁面では西側が、概ね0.05mに満たない程度で焼土化していた。色調は赤色である。

まとめ 本木炭窯跡の特徴は、焼成室の幅が狭く焼成室と焚口との形状に差がない。時期は出土遺物がなく特定が困難であるが、平安時代のものと考えている。調査区南東端からは平安時代の土器器皿、須恵器甕が出土していることから、本木炭窯跡に関連する住居跡が存在する可能性が高い。

(吉野)

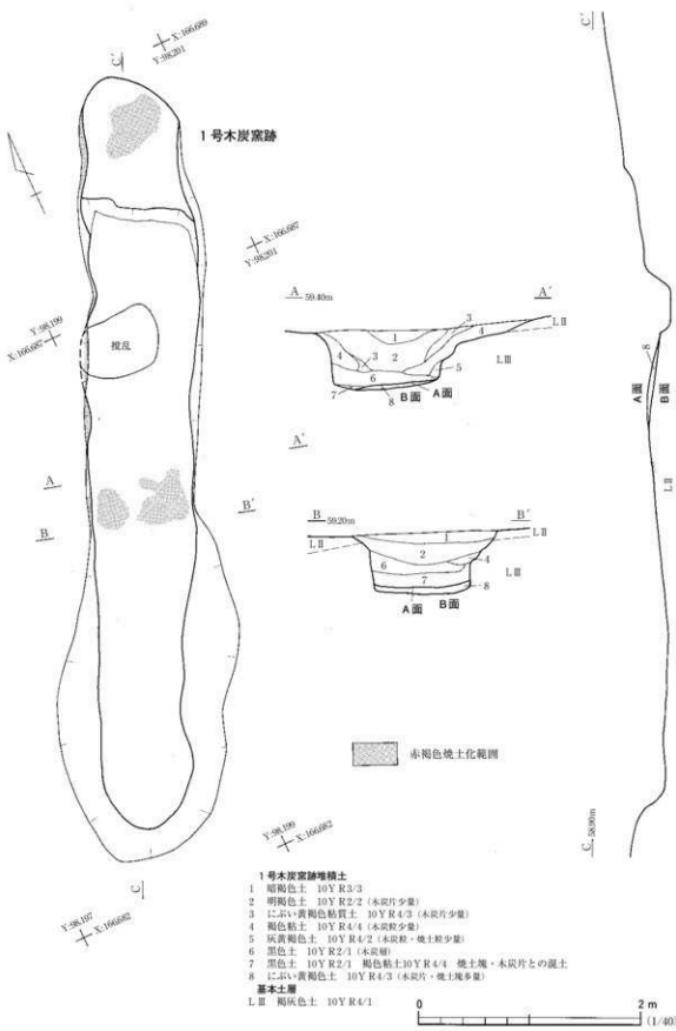


図4 1号木炭窯跡

第3節 土 坑

1号土坑 SK 1 (図5, 写真4)

本遺構は、調査区南部のN18・19グリッドに位置し、標高60.5m前後的小尾根先端頂部の緩斜面に立地している。重複する遺構はないが、小尾根先端部には2～4・10号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は不整隅丸方形を呈し、長軸方位は真北に対し26°西へ傾く。規模は上端幅が143cm、底面幅が84cm、検出面からの深さは44cmである。周壁は急角度に立ち上がり、底面は平坦である。

遺構内堆積土は3層に区分した。上層に褐色土、下層に黄褐色土・暗黄褐色土が堆積している。

本遺構は不整隅丸方形の土坑であることが確認されただけで、その機能を特定することは難しい。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、その形状から縄文時代のものと考えている。

(高林)

2号土坑 SK 2 (図5・6, 写真4)

本遺構は、調査区南端部のP22グリッドに位置し、標高59.5m前後的小尾根先端の南斜面に立地している。重複する遺構はないが、小尾根先端部には1・3・4・10号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は東西に長い楕円形を呈し、長軸方位は真北に対し89°東へ傾く。規模は上端幅が長軸218cm、短軸163cm、底面幅が長軸153cm、短軸119cm、検出面からの深さは43cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面はおおむね平坦であるが北側がわずかに低くなっている。

遺構内堆積土は4層に区分した。上層に褐色土・暗褐色土、下層に黄褐色土・暗黄褐色土が堆積している。遺物は縄文土器が各層から合計16点出土している。そのうち、1点を図6-1に示した。深鉢の口縁部である。口縁部に粗い刻目文が巡り、胴部に変形爪形文が施されている。縄文時代前期後葉の浮島Ⅲ式である。

本遺構は楕円形の土坑であることが確認されただけで、その機能を特定することは難しい。所属時期は、出土土器から縄文時代のものと考えている。

(高林)

3号土坑 SK 3 (図5, 写真4)

本遺構は、調査区南端部のO23・P23グリッドに位置し、標高58.9m前後的小尾根先端の南斜面に立地している。重複する遺構はないが、小尾根先端部には1・2・4・10号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は北壁がわずかに膨らんだ楕円形を呈し、東西南壁は上部が崩落している。長軸方位は真北に対し69°東へ傾く。規模は上端幅が長軸147cm、短軸123cmで崩落部を含めると長軸169cm、短軸142cm、底部幅は長軸130cm、短軸75cm、検出面からの深さは46cmである。周壁は急角度で立ち上がり、東西南壁は壁崩落により上部の傾斜が緩やかになっている。底面は平坦

第3節 土 坑

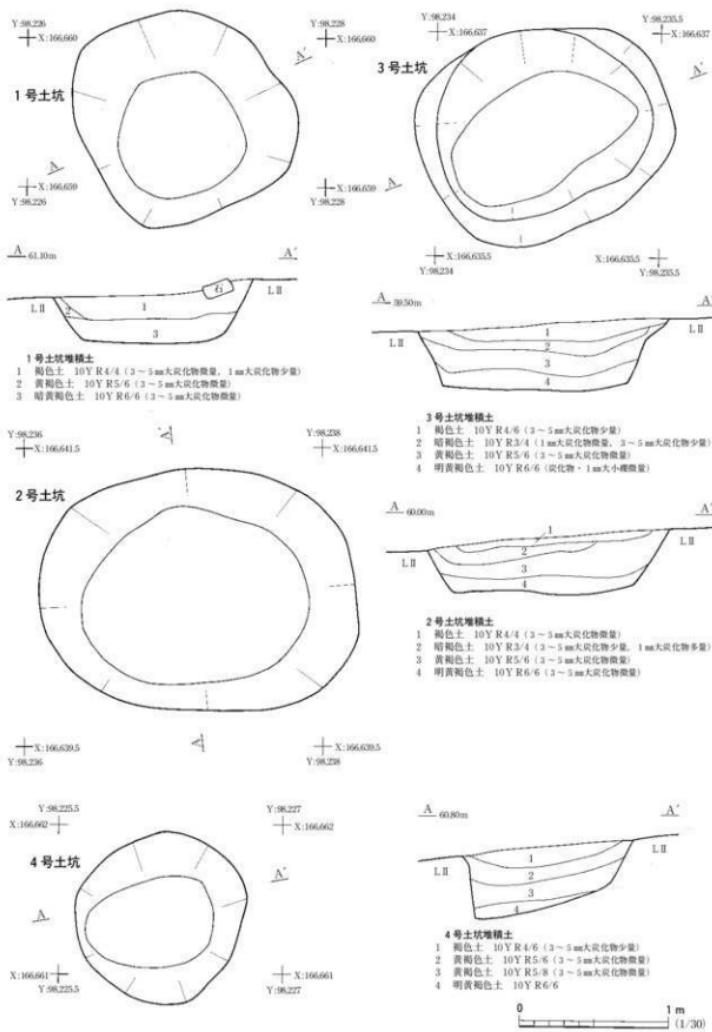


図5 1~4号土坑

である。

遺構内堆積土は4層に区分した。上層に褐色土・暗褐色土、下層に黄褐色土・明黄褐色土などが堆積している。遺物は ℓ 1から縄文土器が4点、剥片が1点出土した。

本遺構は不整楕円形の土坑であることが確認されただけで、その機能を特定することは難しい。所属時期は、出土遺物から縄文時代のものと考えている。

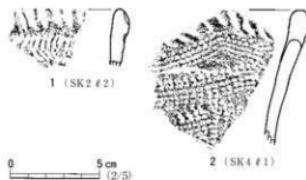


図6 2・4号土坑出土遺物

(高林)

4号土坑 SK4 (図5・6, 写真4)

本遺構は調査区南部のN20グリッドに位置し、標高60.2m前後の小尾根先端頂部の緩斜面に立地している。重複する遺構はないが、小尾根先端には1~3・10号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は上端部が不整円形、底面部が東西に長い楕円形を呈する。長軸方位は真北に対し79°東へ傾く。規模は上端幅が118cm、底面部が長軸87cm、短軸60cm、検出面からの深さは53cmである。周壁は、西壁がほぼ垂直に立ち上がり、東南北壁は急角度で立ち上がる。底面は西に向かって傾斜する。

遺構内堆積土は4層に区分した。上層に褐色土、下層に黄褐色土・明黄褐色土が堆積している。遺物は縄文土器が9点出土した。そのなかで1点を図6-2に示した。深鉢の口縁部である。波状口縁には条線文帯が巡り、胴部には貝殻文もしくは擬似貝殻文が施される。縄文時代前期後葉の興津I式である。本遺構は不整円形の土坑であることが確認されただけで、その機能を特定することは難しい。所属時期は出土土器から縄文時代のものと考えている。

(高林)

5号土坑 SK5 (図7, 写真4)

本遺構は調査区中部のL15グリッドに位置し、標高61.0m前後の小尾根頂部付近の緩斜面に立地している。重複する遺構はないが、約3.5m東南東に9・11号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸方位は真北に対し20°西へ傾く。規模は上端幅が長軸128cm、短軸75cm、底面部が長軸124cm、短軸69cm、検出面からの深さが47cmである。周壁は、すべてほぼ垂直に立ち上がるが、西南北壁は上部が崩落している。壁面は、東壁北半分と西南北壁の崩落部分以外はすべて焼土化している。底面は一定しておらず凹凸が見られる。

遺構堆積土は6層に区分した。上層は褐色土と黄褐色土が交互に堆積している。下層は壁崩落土、その下に炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積している。遺物は縄文土器が1点、 ℓ 1から出土している。

本遺構は、形態の特徴、底面上の炭化物を多量に含む堆積土、壁面が焼土化していることから、本炭焼成土坑と考えられる。所属時期は、これまでの調査例から、平安時代に所属するものと推測

される。

(高 林)

6号土坑 SK 6 (図7, 写真4)

本遺構は調査区中部のH12グリッドに位置し、標高60.0m前後の小尾根南西斜面の緩斜面部に立地している。重複する遺構はないが、約4m西に7号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は東西に長い楕円形を呈し、長軸方位は真北に対し86°西へ傾く。規模は上端幅が長軸132cm、短軸106cm、底面幅が長軸88cm、短軸64cm、検出面からの深さが26cmである。周壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。壁面は、南西隅部の底面付近のみが焼土化している。底面は平坦である。東側と西側の2箇所が焼土化し、その内の一部は還元している。

遺構内堆積土は3層に区分した。上層に暗褐色土・黒褐色土、下層に炭化物を多量に含む黒色土が堆積している。

本遺構は、形態の特徴は異なるが、底面上に炭化物を含む堆積土があること、底面が焼土化していることから、木炭焼成土坑と考える。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、他の木炭焼成土坑と同様、平安時代に所属するものと推測される。

(高 林)

7号土坑 SK 7 (図7, 写真4)

本遺構は調査区中部のG12グリッドに位置し、標高59.8m前後の小尾根南西斜面の緩斜面部に立地している。重複する遺構はないが、約4m東に6号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。平面は東西に長い不整楕円形を呈し、南側に幅16~18cmの三日月状のテラスがある。

長軸方位は真北に対し65°東へ傾く。規模は上端幅が長軸164cm、短軸138cm、底面幅が長軸94cm、短軸69cm、検出面から底面までの深さは24cmである。底面とテラスとの比高差は9cmである。周壁は非常に緩やかに立ち上がる。壁面は、北壁の中央部のみが焼土化している。底面は平坦で、大半が焼土化している。遺構内堆積土は4層に区分した。上層に黒褐色土・黒色土、下層ににぶい黄褐色土が堆積している。

本遺構は、形態の特徴は異なり、底面上に炭化物を含む堆積土も見られないが、壁面と底面が焼土化していることから木炭焼成土坑と考える。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、他の木炭焼成土坑と同様、平安時代に所属するものと推測される。

(高 林)

8号土坑 SK 8 (図7, 写真5)

本遺構は調査区北端部のD 4グリッドに位置し、標高63.9m前後の小尾根頂部の緩斜面に立地している。重複する遺構はなく、また近接する遺構もない。遺構検出面はL V上面である。平面は隅丸方形を呈し、長軸方位は真北に対し87°西へ傾く。規模は上端幅が95cm、底面幅が81cm、検出面からの深さは41cmである。周壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁の一部以外の壁面は上部が崩落しているため、壁面上部では傾斜が緩やかになっている。壁面は、ほぼ全面が焼土化している。底面

第2編 朴始B遺跡

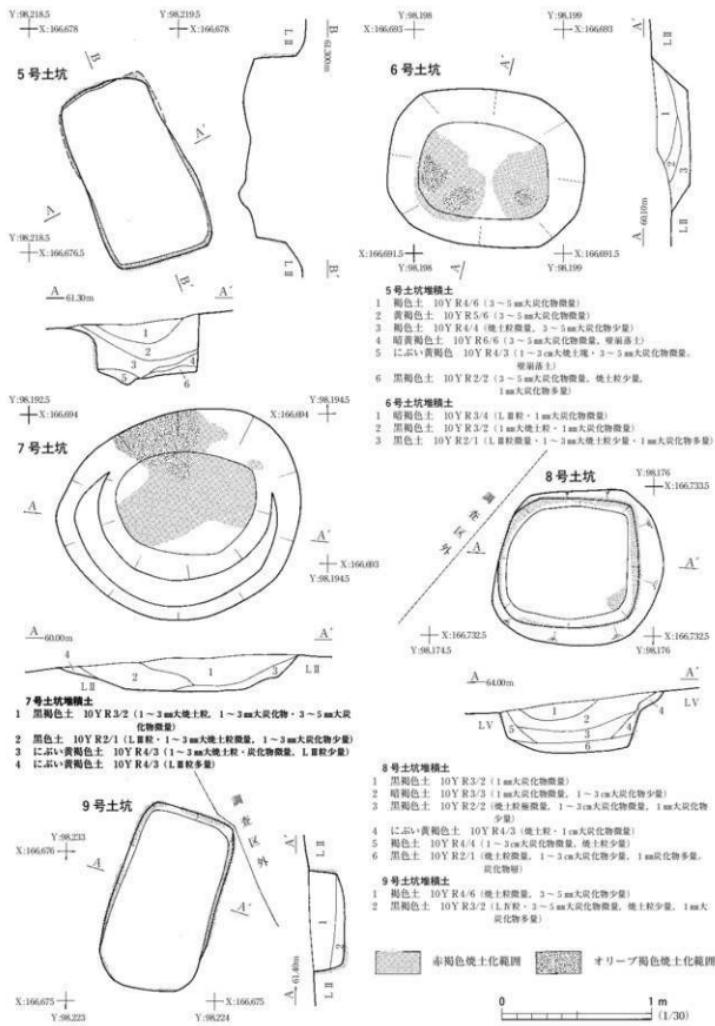


図7 5~9号土坑

は平坦である。

遺構内堆積土は6層に区分した。上層に黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積し、中層に地山に近いにぶい黄褐色土・褐色土が堆積している。下層には炭化物層が堆積している。

本遺構は、形態の特徴、底面上の炭化物層、壁面が焼土化していることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、これまでの調査例から、平安時代に所属するものと推測される。

(高 林)

9号土坑 SK 9 (図7, 写真5)

本遺構は調査区中部のM15グリッドに位置し、標高61.3m前後の小尾根頂部付近の緩斜面に立地している。重複遺構は11号土坑である。11号土坑が埋まったあとその上に造られたもので、本遺構のほうが新しい。約3.5m西には5号土坑がある。遺構検出面はL II上面である。

当初遺構検出を行った時は、本遺構を確認することはできなかった。遺物包含層の掘削を行ったところ、断面に焼土化した壁面が検出され、本遺構が確認されることになった。そのため、本遺構の南壁は残存していない。平面は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸方位は真北に対し18°東へ傾く。規模は上端幅が長軸で126cm残存し、短軸70cm、底面幅が長軸121cm、短軸63cm、検出面からの深さは24cmである。周壁は、残存する東西南北壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面は、東西南北壁のほぼ全面が焼土化している。底面は平坦である。

遺構内堆積土は2層に区分した。上層に褐色土、下層に炭化物層が堆積している。

本遺構は、形態の特徴、底面上の炭化物層、壁面が焼土化していることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、これまでの調査例から、平安時代に所属するものと推測される。

(高 林)

10号土坑 SK 10 (図8, 写真5)

10号土坑は調査区南西部のN22グリッドの平坦面に位置する。検出面はL III b上面であるが、本土坑が掘り込まれたのはL IIであろう。本土坑の南東側には2・3号土坑が位置する。平面形は不整な長楕円形で、長軸方向は南北方向で西側に傾いている。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。壁の外傾の度合いは、北東側が著しい。規模は長軸が174cm、短軸が90cm、深さが46cmである。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 2 黄褐色土はL IVに対応するので、本土坑は掘込土で埋め戻されたと考えている。

遺物は細片のため図示しなかったが、 ℓ 1から縄文土器が2点出土している。これを参考にすると、本土坑の時期は縄文時代晩期と考えている。

(吉 野)

第2編 朴始B遺跡

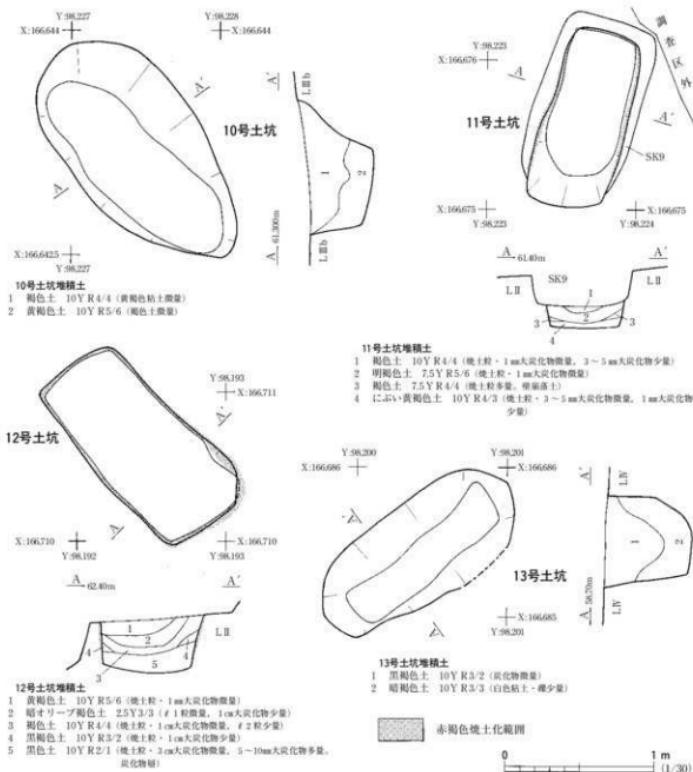


図8 10～13号土坑

11号土坑 SK11 (図8, 写真5)

本遺構は調査区中部のM15グリッドに位置し、標高61.3m前後の小尾根頂部付近の緩斜面上に立地している。重複遺構は9号土坑である。本遺構が埋まつたあとその上に9号土坑が造られているので、本遺構のほうが古いものである。約3.5m西には5号土坑がある。遺構検出面は9号土坑底面である。平面は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸方位は真北に対し13°東へ傾く。規模は上端幅が長軸123cm、短軸58cm、底面幅が長軸99cm、短軸49cm、検出面からの深さは18cm、L II上面からの深さは39cmである。周壁は、東西北壁がほぼ垂直に立ち上がり、南壁は緩やかに立ち上がる。

壁面は東西北壁が焼土化している。底面は平坦である。

遺構内堆積土は4層に区分した。上層に褐色土・明褐色土、その下に壁崩落土である褐色土、最下層ににぶい黄褐色土が堆積している。9号土坑を造るために埋められたものではないと思われる。

本遺構は、形態の特徴、壁面が焼土化していることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、これまでの調査例から、平安時代に所属するものと推測される。

(高 林)

12号土坑 SK12 (図8, 写真5)

本遺構は調査区北部のG 8 グリッドに位置し、標高62.0m前後の小尾根頂部付近の斜面に立地している。重複する遺構ではなく、近接する遺構もない。遺構検出面はL II上面である。平面は北西・南東方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸方位は真北に対し44°西へ傾く。規模は上端幅が長軸145cm、短軸72cm、底面幅が長軸140cm、短軸64cm、検出面からの深さは39cmである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は全面焼土化している。底面は平坦である。

遺構内堆積土は5層に区分した。上層に黄褐色土・暗オリーブ褐色土、中層に褐色土・黒褐色土、下層に炭化物層が堆積している。炭化物層は非常に厚く9~17cmある。

本遺構は、形態の特徴、底面上の炭化物層、壁面が焼土化していることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが、これまでの調査例から、平安時代に所属するものと推測される。

(高 林)

13号土坑 SK13 (図8, 写真5)

本土坑は、調査区中央部南端のI 13グリッドを中心とした位置にある。近接して1号木炭窯跡がある。検出面はL V上面であるが、本土坑が掘り込まれたのはL IIもしくはL IIIであろう。地形的には、南西側の崖に面した小さな沢である。本土坑は、その底面に沢筋と並行して造られていた。平面形は不整な長楕円形で、長軸は南北方向にあり、ほぼ真北方向と一致する。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。規模は長軸が150cm、短軸が70cm、深さが65cmである。

堆積土は2層に区分した。堆積土は基本土層と対応するものがないことから、沢の堆積層により埋まったと考えている。遺物は縄文土器が3点出土しているが、細片のため図示しなかった。

本土坑は底面に小穴がないが、その形状から落し穴と考えている。時期は出土遺物を参考にすると、縄文時代早期末葉とする。

(吉 野)

第4節 遺物包含層

概要(図9)

遺物包含層からは、縄文土器が1,842点、土師器が17点、須恵器が2点、石器が14点、剥片37点、石核が1点出土した。

遺物包含層は南西向き斜面及び、小尾根のL II・IIIが該当する。この範囲は、北西から南東に延びる沢に面し、調査区では崖となっている。このような地形から、集落からの廃棄物の投棄場所として利用されたものと考えている。集落跡は、調査区東側に広がる尾根頂部にあるものと推定している。なお、L IIIからの遺物出土量が少ないため、L IIから出土した縄文土器に限って、グリッド別の出土点数を図9に示した。

遺物の出土点数は、調査区南東側で多く北西側に向かうにつれて減っている。なお、E 9グリッドの出土点数が他と突出して多いが、これは1個体の土器が破片の状態で出土したものである。

縄文土器(図10~13、写真6・7)

I群土器(図10-1~19) 早期の土器である。1~4は二本引きによる同時施文具で沈線文が、5~6は一本引きによる沈線文が描かれている。7は底部付近の破片で、縦方向の連続刺突文がなされている。8は先端が尖った棒状工具による縦・斜方向の押引文がなされている。9~13は内面に条痕文がなされている。9~13の外面は9が条痕文、10が波状口縁に口唇部には刻目が入る。条痕文を地文として、二本引きによる同時施文具で沈線文が描かれている。11~13は外面に斜縄文が施されている。14~15は縄文に半截竹管による沈線文が、16は縄圧痕文に半截竹管による沈線文が描かれている。17は縄文に一本引きによる沈線文が描かれている。18は撚糸文が施されている。19は胴部下端の破片である。1~8は早期中葉にあたり1~7が田戸下層式、9~19は早期末葉の大烟G式にあたる。大烟G式土器は図示したもの以外で20点出土している。

II群土器(図10-20~37、図11-1・2)

前期初頭から前葉にかけての土器である。

図示したもの以外では、27点出土している。

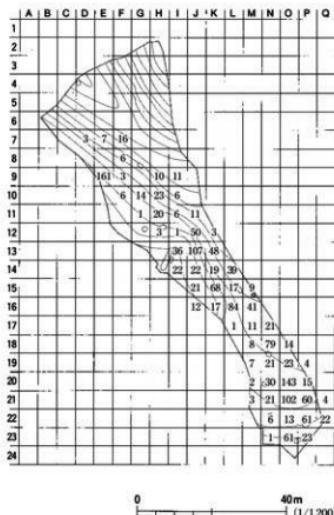


図9 遺物包含層縄文土器出土点数(L II)

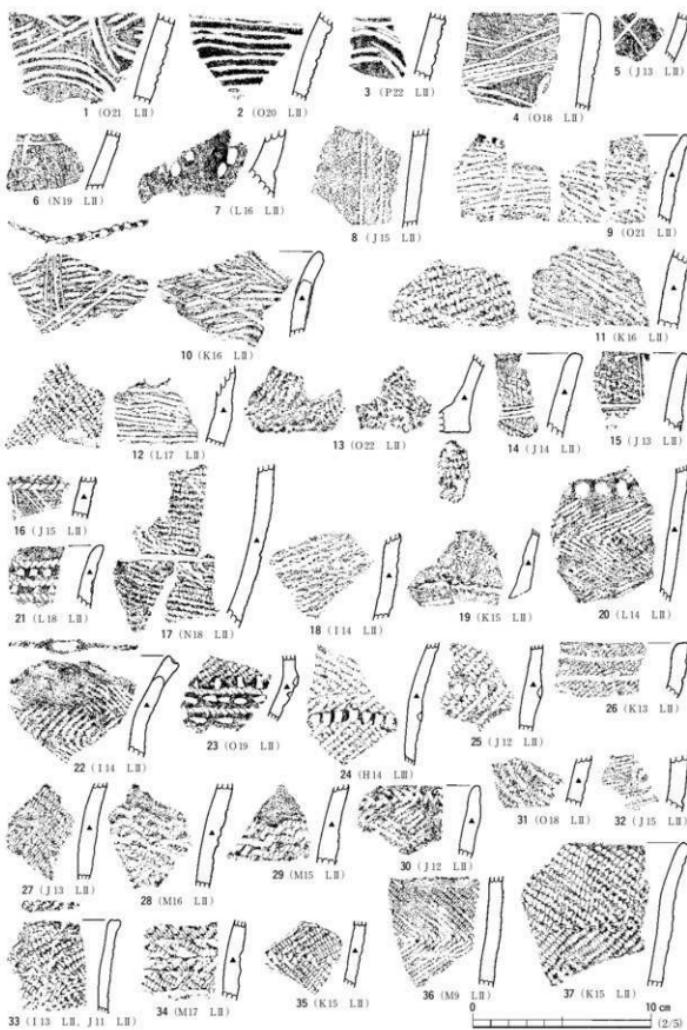


図10 遺物包含層出土遺物(1)

図10-20・22・24・25・33・37は非結束羽状縄文が、図10-36には結束羽状縄文が施される。図10-20の無文帯には指頭圧痕が巡っている。図10-21・23は縄圧痕文の空白部に刺突文が充填されている。図10-22は波状口縁で、口唇部には頭頂部に沈線が施される。図10-24・25には低い隆帯に刻目が施されている。図10-26・31・32には縄文に縄圧痕文がなされている。図10-27は撚糸文、図10-28・29は同一個体で、結節回転による綾格文がなされる。図10-30の口縁には刻目が入る。図10-33の口唇部には縄文が施される。図10-34は縄文を地文として「>」字状の刻目が施されている。図11-1・2は末端にループが付く縄文で、2はそれを羽状に配したものである。

Ⅲ群土器A類 (図11-3~30、図12-1~6) 前期後葉の土器で大木式系のものである。胴部には縄文を地文として文様が施されている。図11-3には竹管円文がなされる。大木3式である。

図11-4~11の口唇部の施文は4~11が刻目、10が縄文、11が「W」字状の粘土紐の貼付である。図11-5・6・24・27の口縁部と胴部との境には結節回転による綾格文が施されている。図11-28・29、図12-2~5では縱もしくは斜めに綾格文が施されている。このうち、3・4の地文は網目状の撚糸文が施されている。なお28・29は同一個体である。図11-7・10には刺突文が施されている。7は口縁部と胴部の境に、10は口縁部である。図11-12~14・16~18には沈線によって波状文・直線文・曲線文が描かれている。図11-15・図12-1・6は撚糸文である。図11-19~25には、刻目が入った粘土紐が貼り付けられ、直線や曲線などの幾何学的な文様が描かれている。さらに、23では縱方向に刻目が加わる。なお、19~22は同一個体である。図11-26には隆線によって曲線が描かれる。図11-30には縄圧痕文がなされている。図11-4~30、図12-1~6は、大木4式土器である。大木4式土器は図示したもの以外で21点出土した。

Ⅲ群土器B類 (図12-7~20、図13-1) 前期後葉の土器で浮島式・興津式系のものである。図12-7~10・14~16には、変形爪形文と集合沈線が施されている。7は集合沈線によって菱形文が描かれている。さらに、16には竹管による刺突文が加えられている。図12-12・13、図13-1には貝殻波状文が施されている。図12-7~16、図13-1は浮島Ⅱ式土器である。浮島Ⅱ式土器は図示したもの以外で35点出土した。

図12-17・18は口縁部に条線帯と変形爪形文がなされる。図12-19は17と同一個体である。図12-17~19は浮島Ⅲ式土器である。図12-20の口縁部には条線帯が、胴部には貝殻文もしくは擬似貝殻文が施されている。図12-20は興津Ⅰ式土器である。

Ⅳ群土器 (図13-2~13) I~Ⅲ群土器以外の時期以外のものを集めた。2は内湾しながら立ち上がる口縁である。頸部に1条の凹線が巡り、ボタン状の貼り付けがなされる。前中期後葉の土器である。3・4は同一個体のもので、胎土に金雲母や貝殻を漬したような白色粒が含まれている。3には縱方向の隆起線文に沈線文が付随し、撚糸文も施されている。中期中葉の土器である。5~7には斜行縄文がなされている。中期後葉~後期初頭にかけての土器である。8の口唇部には刻目がなされている。口縁部と胴部の境には、結節回転による綾格文が施されている。9~12には撚糸文がなされている。そのうち、10は網目状となっている。10の内面にはベンガラが塗られていた。13

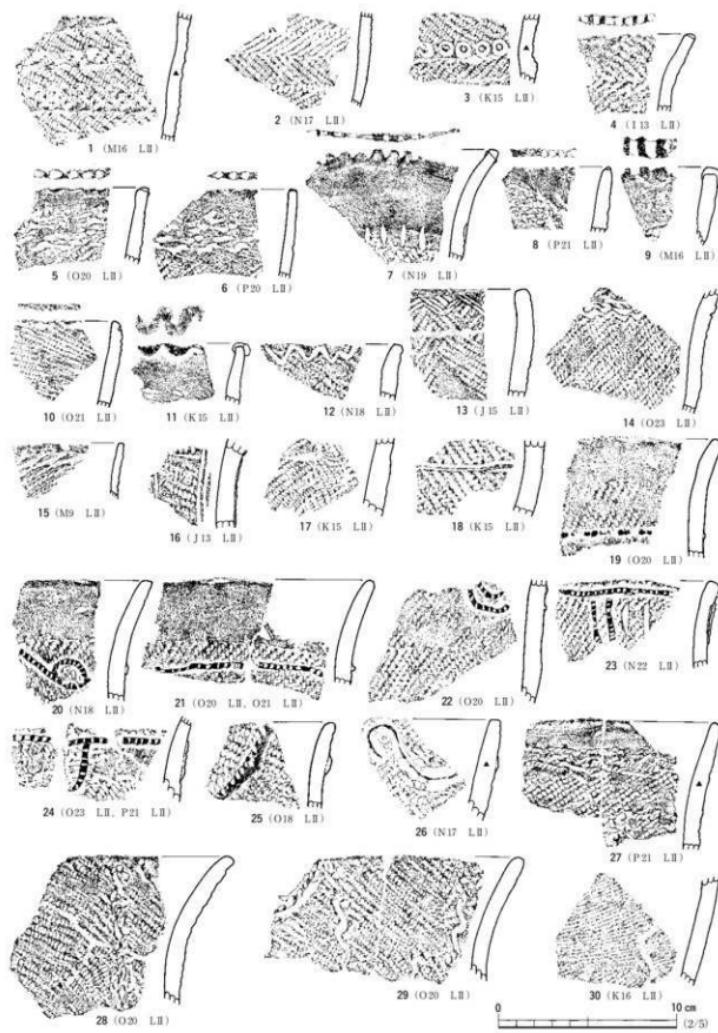


図11 遺物包含層出土遺物(2)

第2編 朴舶B遺跡



図12 遺物包含層出土遺物(3)

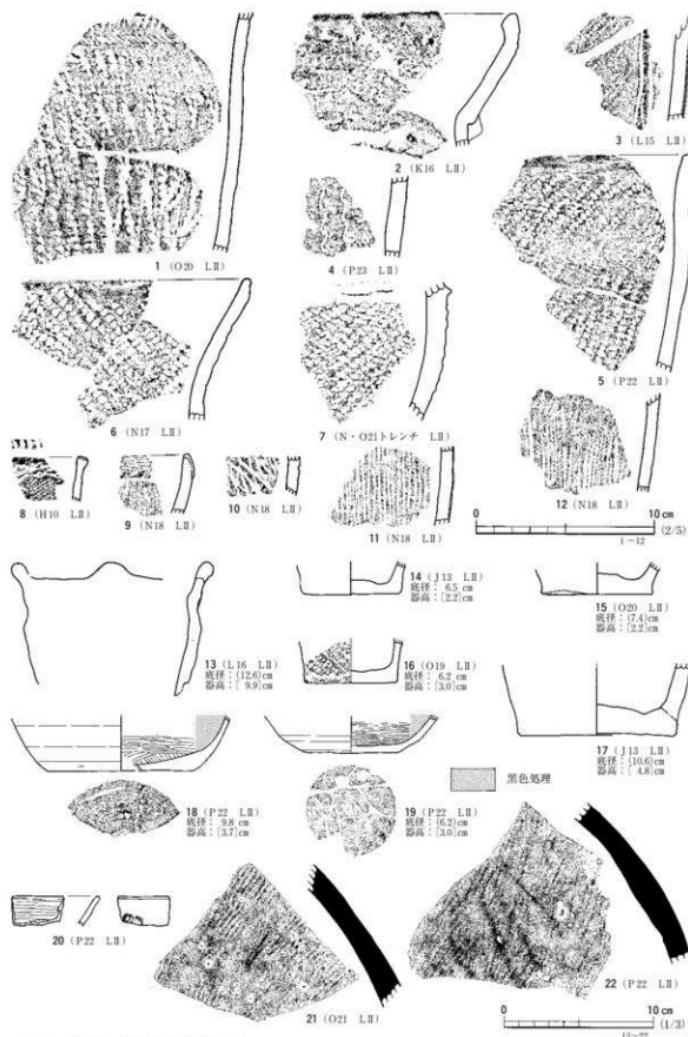


図13 遺物包含層出土遺物(4)

第2編 朴舶B遺跡

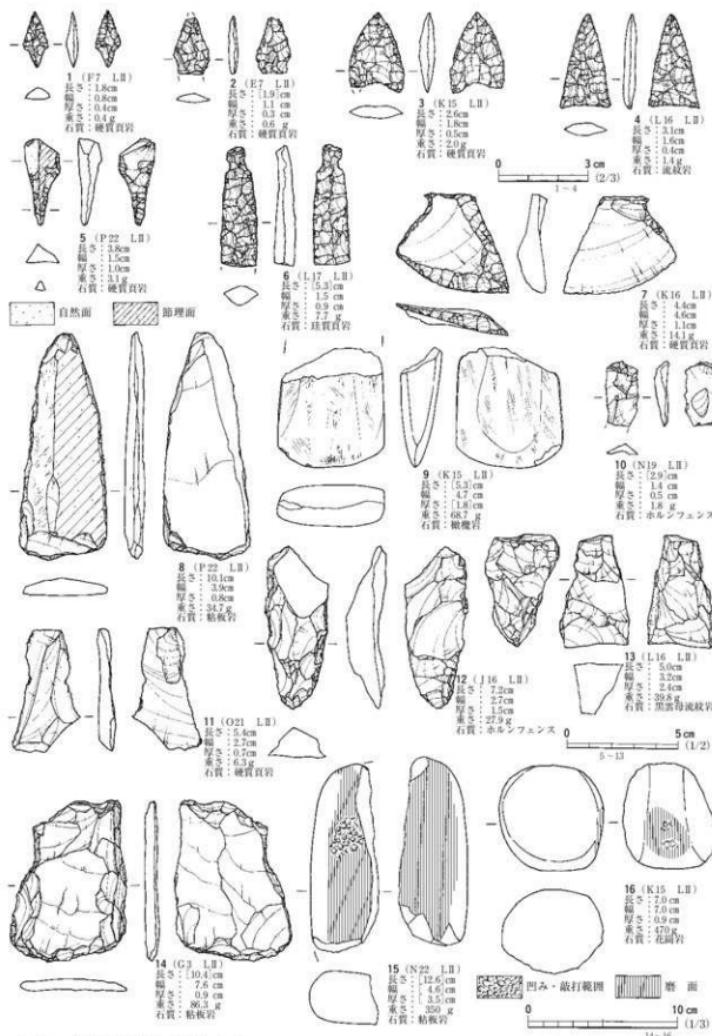


図14 遺物包含層出土遺物 (5)

は無文のもので、口縁部に突起が付く。図13-8～13は晩期中葉頃の土器である。

V群土器 (図13-14～17)

底部の破片をまとめた。底部外面はナデによってスリ消されている。16の胴部下端には結節回転による綾絞文が施されている。

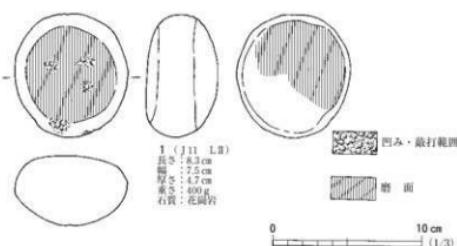


図15 遺物包含層出土遺物(6)

土師器・須恵器 (図13-18～22)

18～20は土師器杯である。いずれも内面には黒色処理・ミガキがなされている。18・19の底部外面には、回転ヘラ削りの再調整がなされている。20の体部外面には墨書がなされているが、判読不明である。21・22は須恵器甕である。内面に無文のアテ具が、外面に平行タタキがなされる。

石器類 (図14-15, 写真8・9)

図14-1～4は石鎚である。1が凸基有茎鎚、3・4が凹基無茎鎚である。2は先端部と基部が欠損しているが、他の石鎚よりも薄いので未成品とも考えている。図14-5は石錐である。剥片の一端に加工を施したものである。図14-6・7は石匙である。6は縦型石匙で、長軸に沿ってつまみが作られている。先端部が欠損している。両面に加工が及んでいる。7は横型石匙で、素材の腹面を多く残す。つまみが欠損している。図14-8は石剣で、研磨などがされていないので、調整途中のものと考えている。図14-9は磨製石斧である。断面が扁平なもので、両刃となっている。基部が欠損している。図14-10～12は剥片である。11には末端に自然面を残す。12は二次加工のあるもので、側縁に微細な剥離がなされている。図14-13は石核である。接合関係はないが、同じ石材の剥片が8点出土している。最終剥離面は正面の上である。打面転移が著しいので、定型的な剥片は採らなかったのであろう。図14-14は石鍬で、左側縁に抉りが入る。図14-15・16、図15-1は磨石である。図14-15・図15-1は平坦面を磨面とするもので、図14-16は側縁を磨面とするものである。

(吉野)

第3章 まとめ

縄文時代前期後葉の土器 調査区からは縄文時代早期・前期・中期～後期・晚期の土器、平安時代の土陶器・須恵器が出土した。ここでは、主体を占める前期後葉の大木4式土器・浮島II式土器についてまとめておく。

調査区から出土した大木4式土器は、平口縁で口縁が外傾するものが多い。文様は図11-5・6のように口唇部に刻目があり、口縁部無文帯に綾格文を重層して施すもの、図11-12～14のように沈線文により波状文を施すもの、図11-19～25のように、粘土紐の貼付文により幾何学的文様を描くものなどがある。内面の調整はナデによるものが多い。胎土は比較的多くの砂粒が含まれ、僅かながら纖維の痕跡がみられるものもある。色調は黄褐色・暗褐色などである。

浮島II式土器は、調査区から出土した土器のなかで、多くを占めているものである。このことから、該期の集落域が付近にあることを考えている。調査区から出土した浮島II式土器は、平口縁で口縁が外傾するものである。文様は、図12-7のように、変形爪形文と集合沈線による菱形文によって構成されるもの、変形爪形文と貝殻文によって構成されるものなどがみられた。

内面の調整はミガキによるものが多い。胎土は比較的少なく、色調は赤褐色・褐色などである。

以上の点から比較すると、大木4式土器と浮島II式土器は調整・胎土・色調などが異なっている。のことから、出土量が少ない大木4式土器を搬入品とすることも可能であるが、判別できなかった縄文施文の土器が大木4式土器の可能性もあり、出土量でどちらが搬入品であるかは現状では判別できない。在地で大木系と浮島系の土器を作るに際して、粘土・含有物・調整を変えていたとも推察できる。

木炭窯跡 調査区からは木炭窯跡が1基・土坑を13基検出した。ここでは、遺構の主体である木炭窯跡についてまとめておく。1号木炭窯跡は南西側に開く小さな沢の底に造られていた。全長7m、焼成室の最大幅は1mである。平面形は焼成室が不整な隅丸長方形で、作業場が不整な長楕円形である。焼成室と焚口との境が明瞭ではない。

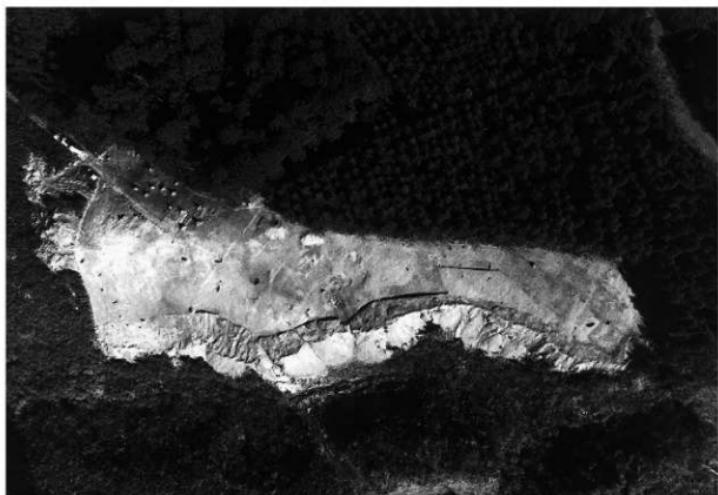
本遺跡から南側へ約450mの地点にある朴船C遺跡から6基の木炭窯跡が検出されている(第3編所収)。これらの焼成室から焚口までの平面形は、焚口の幅が狭くなる羽子板状であり、焼成室と焚口との境は明瞭である。規模は全長が9.4～12.2m、焼成室最大幅が1.4～2.4mである。

本木炭窯跡と比較すると、平面形・規模においても大きな違いがある。この違いは、木炭製造の好適地である朴船C遺跡と不適地である朴船B遺跡との違いと考えている。朴船B遺跡にまで窯を築いたのは、伐採により朴船C遺跡の周辺に立木がなくなったため、朴船B遺跡に窯を築くことになったのであろう。その関係は、試掘調査で木炭窯跡が確認されている朴船D遺跡の調査でさらに明らかとなるであろう。

(吉野)



1 調査区遠景(西から)

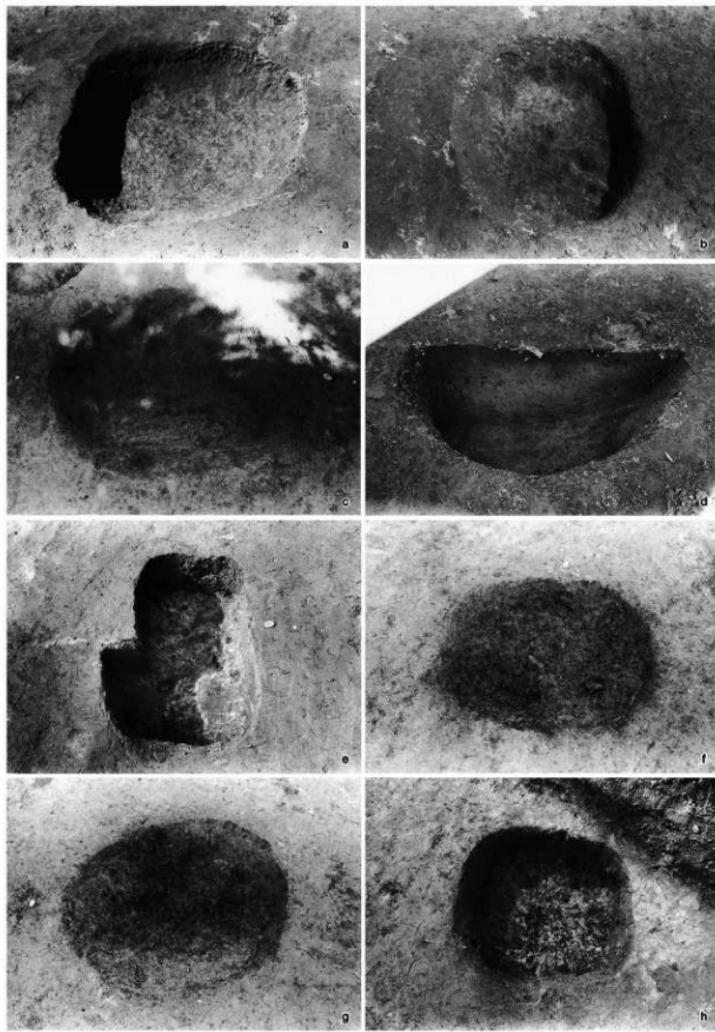


2 調査区全景(南西から)



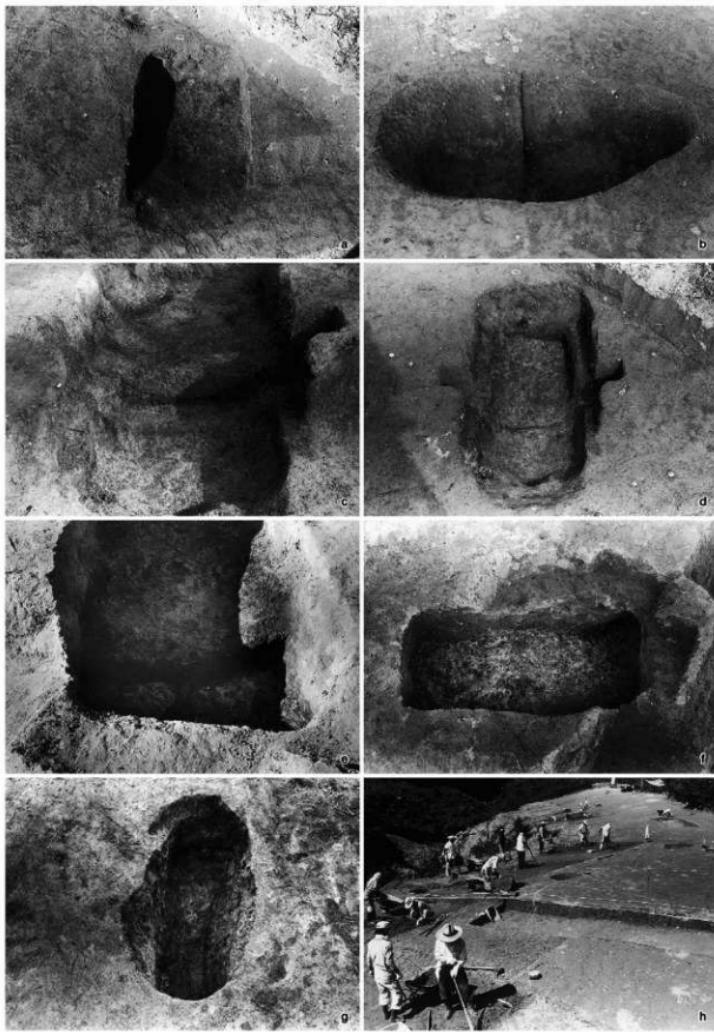
3 1号木炭窯跡

a 全景1(南西から) b 全景2(南東から)
c 烧壁(南東から) d 作業場土層(南西から) e 使成室土層(北東から)



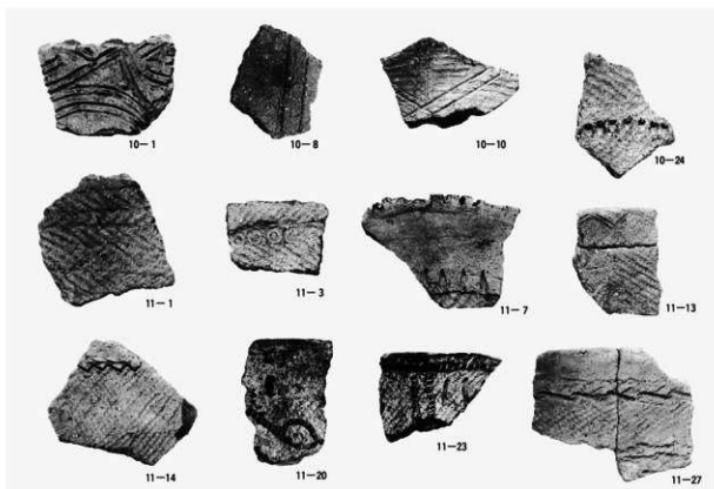
4 1～8号土坑

a: 1号土坑全貌(北東から) b: 2号土坑全貌(西から)
c: 3号土坑全貌(南東から) d: 4号土坑全貌(南から)
e: 5号土坑全貌(南東から) f: 6号土坑全貌(南から)
g: 7号土坑全貌(南から) h: 8号土坑全貌(東から)

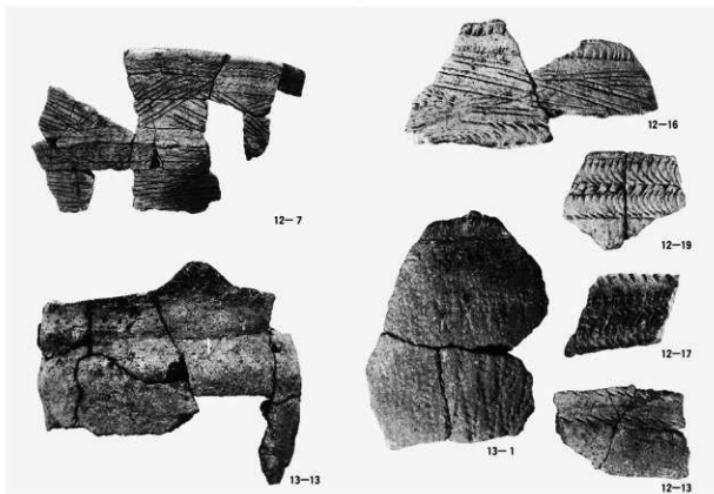


5 9～13号土坑、作業風景

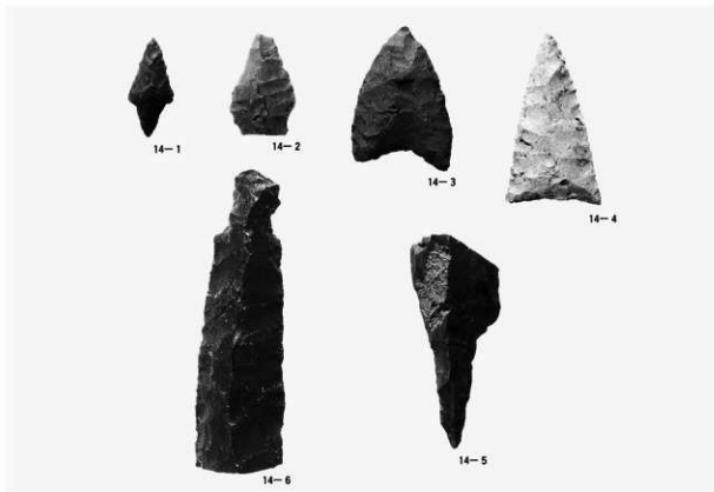
- a 9号土坑全貌(南から)
b 10号土坑全貌(南西から)
c 11号土坑上層(南から)
d 11号土坑全貌(南から)
e 12号土坑炭化物剝離剤(南東から)
f 12号土坑全貌(南西から)
g 13号土坑全貌(北東から)
h 作業風景(南から)



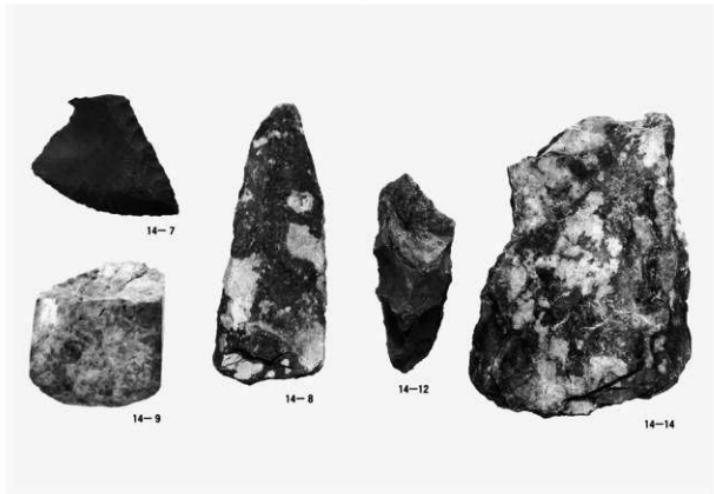
6 遗物包含层出土遗物(1)



7 遗物包含层出土遗物(2)



8 遺物包含層出土遺物(3)



9 遺物包含層出土遺物(4)